『「鬼滅の刃」流 強い自分のつくり方』の著者 井島由佳氏に聞く！

『鬼滅の刃』に学ぶ 強い若手を育てる上手な指導法

個性に合わせた指導を心がけ 時には若手に「託す」ことも大切

井島由佳 いじま・ゆか

大東文化大学社会学部社会学科助教
心理・キャリアカウンセラー

1970年東京生まれ。東京家政大学大学院家政学研究科人間生活学専攻修了。博士（学術）。専門はマンガ心理学、教育心理学、キャリア心理学。CDA、産業カウンセラー。ライフキャリアやマンガに関する研究を行う

2020年、一大ブームを巻き起こしたマンガ『鬼滅の刃』。主人公・竈門炭治郎をはじめとする人間が「鬼」と呼ばれる不老不死の敵に挑むストーリーは、多くの人の心を捉えた。

この強大な敵に立ち向かっていく炭治郎たちのひたむきな姿を教科書とし、自分を成長させる心構えを説く書籍が『鬼滅の刃』流 強い自分のつくり方』（アスコム刊）だ。著者である井島由佳氏は大東文化大学でキャリア心理やマンガ心理を研究する。

鬼滅の刃に登場するキャラクターの生き方やセリフは、マネジメントやOJT指導を行ううえでも参考になるという井島氏。鬼滅の刃を踏まえた人材育成のポイントを伺った（以下、敬称略）。

「再起力」が高いキャラクターが満載

――まず井島さんが書籍を書くにあたり鬼滅の刃を題材にした理由を教えてください。

井島 私は大学でマンガ心理を研究テーマの1つとしており、授業や講演ではよく少年マンガを題材に取り上げています。少年マンガは主人公が成長する物語が多く、人が壁を乗り越えていくために参考となる部分がとても多いからです。

その中でも鬼滅の刃は心理学用語で「レジリエンス＝再起力」が高い登場人物が豊富で、「どんなに苦しくても、どんなにつらくても立ち上がる」というテーマが前面に押し出されていますよね。私たちが現実世界で自分を成長させるためのヒントがたくさん盛り込まれていることから、書籍で取り上げました。

――本書では鬼滅の刃の登場人物のセリフ・生き方などを引き合いに出し、「情けない自分」「弱い自分」から抜け出すためのヒントを紹介しています。金融業界でも心が折れて離職する若手が少なくないのですが、何が要因だと思いますか。

井島 今の若い人でいいますと、みんな仕事に対して自分なりのイメージを持って就職しています。でも実際に仕事に取り組むと自分が思い描いていたイメージと違う――そのギャップを乗り越える力が弱いのではないでしょうか。

例えば、学生時代までは周囲に家族や友達しかいないので、コミュニケーションで困るケースはそうありません。ところが、社会人になると先輩や上司、お客様という、まったく知らない人とコミュニケーションをとる機会が一気に増える――そこで思うように仕事が進まず、挫折してしまうのです。

若手の周囲にいる人にも原因があります。いわゆるジェネレーションギャップといわれるもので、「そんなの誰だって乗り越えられる」「自分たちは乗り越えてきた」という思い込みです。

これでは悩んでいる若手の気持ちを理解してあげられないし、「なんでできないんだ」と見下す――口に出さなくてもそうした態度はどこかに表れてしまいます。若い人はそうした周囲の評価を敏感に感じ取り、自分を責めて休んでしまったり、他人のせいにして周囲との軋轢を生んだりしてしまうわけです。

一人ひとり指導を変えることが大切

――若手をそのような状況に追い込まないため、先輩や上司はどんな指導を行うべきか、鬼滅の刃で参考になる人物はいますか。

井島 鬼殺隊（鬼を狩る剣士の組織）の最高管理者・産屋敷耀哉は理想の上司ですよ